様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　6　月　29　日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：２００９～２０１０
課題番号：２１７３０６２５
研究課題名（和文）　ヴィゴツキーの発達論を手がかりとした幼年期カリキュラムに関する基礎的研究

研究課題名（英文）　A Study of Early Childhood Curriculum from Vygotsky’s theory.

研究代表者
岡花　祈一郎（OKAHANA KIICHIRO）
広島大学・大学院教育学研究科・助手
研究者番号：５０５１２５５５

研究成果の概要（和文）：
本研究では、ロシアの心理学者ヴィゴツキーの理論を手かがりとした、幼児期から児童期前期（本研究では以下、幼年期と標記）までのカリキュラムに関する理論的基礎を明らかにした。
第一に、児童学文献など一次資料の読解から、ヴィゴツキーは「7 歳の危機」のなかで、就学移行期を発達の契機としてとらえ、過渡期的なモメントとして位置づけていたことを明らかにした。
第二に、ヴィゴツキーの危機のとらえ方、および、彼の最近接発達領域の概念をふまえるならば、就学期の子どもの困難性と小学校への憧れを利用したカリキュラムの在り方が構想できることを明らかにした。
第三に、上記の 2 点を踏まえ、小学校の文化的道具などを用いた「学校ごっこ」プログラムを実施することを提起した。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study’s is to explore a theoretic foundation of Early Childhood Curriculum from Vygotsky’s theory.
The study arrived at the following：
1. Vygotsky said in his “ Crisis of seven year-olds”that a period of transition for school is not only negative moment but also developmental moment for child progress.
2. It is important that Children’s difficulty and their “adoration” for school should be considered for a transition curriculum.
3. For the considerations above, this study suggests that the program is good for preparation of school through “Make-believe play of School” that used of cultural tools in school.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	240,000	1040,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：幼児教育学・保育学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：ヴィゴツキー，発達，保幼小連携，カリキュラム

１．研究開始当初の背景

近年、幼児教育領域では「小一プロブレム」と呼ばれる就学前から小学校への接続が問題となっている。そこでは、保育所・幼稚園で、遊びを中心とした時間的にも空間的にも自由な文化のなかで育ってきた子どもたちが、学校文化のなかでは上手く自己の力を発揮できないでいる現状がある。それに対して、行事交流、教員の人事交流、カリキュラム研究など様々な試みがなされている。しかし、幼児期と児童期にかけての子ども自身がどのような葛藤や悩み、そして発達的課題を抱えているかが不明確なままである。海外に目をむければ、幼児期から学童期における一貫したカリキュラムが存在している。アメリカ、NAEYC による「発達にふさわしい教育実践」では乳児から８歳までの子どものカリキュラムを構想している。しかし、現在の日本では、小学校低学年を含めた一貫した幼年期カリキュラムがほとんど存在していない。その理由として、制度上の違いは別として、就学前から小学校、あるいはそれ以後の長いスパンでとらえた発達理論の不在が考えられる。

そこで、手がかりになると考えられるのがロシア・ソビエトの心理学者ヴィゴツキーである。ヴィゴツキーは晩年の児童学研究のなかで、当時のロシアの就学時期を「7 歳の危機」としてとらえている。それは、外的環境の変化と子どもの認識プロセスの変化の葛藤の時期であると指摘している。ヴィゴツキーの研究枠組みは発達・教育という現象を、個人レベルではなく社会文化的な文脈と密接に関係したものとしてとらえ、ピアジェの個人主義的発達観とは対局に位置づけられてきた。他方、近年では、社会的構成主義の立場から、プラグマティズムやバフチンなどの言語理論との親和性などから、状況論的学習理論などにおいてもヴィゴツキーの理論が用いられている。しかし、このような動向とは別に、ヴィゴツキー研究において児童学（педология）とよばれる領域は、児童学批判（1936）以後、スターリン時代を中心として、ほとんど封印されてきた研究領域でもある。この児童学はヴィゴツキーが晩年に最も力を入れていた領域であり、就学期の子どもの発達と教育の関係に深く言及している重要な領域でもある。また、子どもを総合的に研究しようとしたこの領域の知見は、今日の子どもをめぐる状況になかでも十分に意義あるものであると考えられる。そこで、本研究では特にヴィゴツキーの児童学研究に焦点をあてて、幼年期における発達と教育の関係について検討を行う。

２．研究の目的

本研究の目的はヴィゴツキーの発達論を手がかりとした幼年期カリキュラムを構築することである。第一に、これまで未刊行であったヴィゴツキーの児童学研究を中心に就学期の発達的、教育的問題を理論的に整理する。特に、就学期の「7 歳の危機」という概念に着目し、その「危機」をヴィゴツキーがどのようにとらえていたのかを児童学研究を整理することで明らかにする。

第二に、社会文化的アプローチが強調する文化的道具(cultural tools)による媒介された認知発達の理論をベースとして、就学前と就学以後のシンボルの違いに着目し、幼年期カリキュラムを作成する。

３．研究の方法

本研究では、以下のような方法論と手続きで行った。

（１）　ヴィゴツキーの理論的に整理するため、文献研究を行った。2009 年 11 月にモスクワ（ロシア人文大学）で行われたヴィゴツキー記念国際会議第 10 回大会に参加し、情報交換を行うとともに児童学に関する一次文献を収集し、整理した。

（２）　ヴィゴツキー理論が乳幼児カリキュラムにおいてどのように位置づけられているかを先行研究として検討を行った。

（３）　ヴィゴツキーの遊び理論や最近接発達領域の研究などをふまえ、独自の就学前プログラムを構想した。

４．研究成果

本研究の研究成果は以下のように整理できる。

第一に、これまで十分に検討されてこなかったヴィゴツキーの児童学領域の知見を整理することで、「7 歳の危機」などを中心として幼年期（就学移行期）の幼児の発達特性を明らかにした点にある。ヴィゴツキーはこの時期の危機を決してネガティブなもとしてと

らえていたわけではなく、その次なる成長発達への重要な契機としてとらえていたことを明らかにした。この点は、従来、「発達の連続性」という言葉で、就学前と小学校との教育内容を安易に連携する試みや、幼児期からの早期教育型の教育方法への批判として位置づけられる。

第二に、ヴィゴツキーの諸理論から、就学前の遊びや記号的活動を鍵としたプログラムの可能性を示唆したことにある。

本研究では、幼年期カリキュラムとして、ヴィゴツキーの遊びに関する論考やシンボル活動（身振り、描画など）に関する知見に着目した。着目した理由としては、遊びや活動といった保育のなかでの子どもの経験をいかに、個人のなかで意味づけ再構成していくかが就学前と小学校をつなぐ重要な知見であると考えたからである。この点に関して、ヴィゴツキー的な観点に立つならば、小学校における文化的道具（鉛筆、ノートなど）による媒介活動のなかで、認知的に経験が再構成がなされ、その子どものなかで何らかの概念として意味づけられていくと考えられる。

欧米のプログラムでは自己のアイデアを表現する媒体として、描画やコラージュ、文字や数字やチャート図などが挙げられており、これらはヴィゴツキーの文化的道具を基礎としたものである。本研究では、これらのような表現媒体としての記号の獲得とは異なり、小学校の文化的道具を用いる環境に身を置くことで、「小学校へのあこがれ」を抱くことの重要性を指摘した。

また、本研究では就学を、就学前文化から小学校文化への「文化間越境」であるととらえた。この越境は個人には「危機」として顕在化し、教育的困難としてたちあらわれるが、この越境は発達の大きな契機であると考えられる。そこで着目したのが「あこがれ」という心情面であった。この「あこがれ」こそが、ヴィゴツキーの指摘する遊びの最近接発達領域の概念に結びつくと考えたからである。

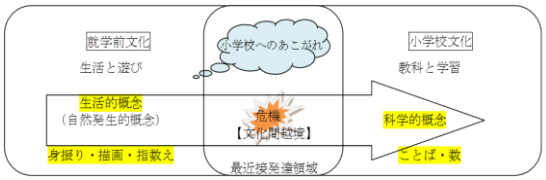

図１．就学前と小学校への発達的移行図

本研究では、文字や数を早期獲得し小学校の学習内容を先取りした保育内容ではなく、むしろ、小学校文化に慣れるなかで「小学校へのあこがれ」を醸成することを目的として「学校ごっこ」プログラムを構想した。

就学前の子どもたちが小学校の「生徒役」となり、保育者が「先生役」になり、チャイムや椅子など学校文化を取り入れた環境のなかで「学校ごっこ」を行う。このような活動では、小学校の文化的道具を子どもたちがあつかうなかで、その文化的振る舞いなど学校ハビトゥスを身につけることができると考えられる。

以上のような具体的なプログラムは欧米の認知的発達に特化した幼年期カリキュラムとはことなる保育に根ざした就学移行期カリキュラムの新しい形態であると言える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

1. 岡花祈一郎・牧亮太・佐藤　　幼児期の模倣の役割とその意味，幼年教育研究年報，第 32 巻，査読無，印刷中.
2. 大野歩・真鍋健・岡花祈一郎・七木田敦，幼稚園における非日常的な体験とその意味について－幼児たちはどのようにゴーリーに出会うか－，保育学研究第４８巻，査読有，2010，pp47-57.
3. 岡花祈一郎，ヴィゴツキー発達論における「崩壊」教育学研究紀要第 55 巻，査読無 2009，pp1-5.
4. 岡花祈一郎・多田幸子・浅川淳司・杉村伸一郎，保育における最近接発達領域に関する検討，幼年教育研究年報，第 31 巻，査読無，2009 ，pp131-137.

〔学会発表〕（計５件）

1. 岡花祈一郎・七木田敦，保幼小連携における教員の意識調査－H 市の事例を通した現状と課題－，中国四国教育学会第 62 回大会，2010 年 10 月 21 日，香川大学.
2. 岡花祈一郎，日本と米国におけるヴィゴツキーの受容に関する比較検討，日本教育学会第 69 回大会，2010 年 8 月 22 日，広島大学.
3. 岡花祈一郎，17．ヴィゴツキーの最近接発達領域と遊び，日本保育学会第 63 回大会，

2010年5月22日，松山東雲大学.
4. 岡花祈一郎，ヴィゴツキー発達論における「崩壊」に関する検討，中国四国教育学会第61回大会，2009年11月22日，島根大学.
5. 岡花祈一郎，幼年期カリキュラムにおけるヴィゴツキーの位置づけに関する検討日本教育方法学会第45回大会，2009年9月27日，香川大学.

〔図書〕（計１件）
1. 岡花祈一郎「第6章カリキュラム：教育実践の基礎理論」，子どもの教育原理，2011年3月，建帛社，63-75.

６.研究組織
（1）研究代表者
岡花　祈一郎（OKAHANA KIICHIRO）
広島大学・大学院教育学研究科・助手
研究者番号：５０５１２５５５

（2）研究分担者
（　　）
研究者番号：

（3）連携研究者
（　　）
研究者番号：